

平成 27 年 5 月 22 日

平成 27 年度 博士学位請求論文審査報告書

提出者 石川健太

論文題目

社交不安障害の情動刺激に対する情報処理特性：覚醒水準と比喩的関連づけ

審査委員

(主査) 大久保街亜 (専修大学人間科学部教授)

(副査) 田中章浩 (東京女子大学現代教養学部准教授)

(副査) 岡村陽子 (専修大学人間科学部教授)

1. はじめに

社交不安とは、社会的状況において他者からの注目や否定的な評価を受けることに対し強い不安や恐怖を抱く症状である。どのようなひとでも注目を集める状況では多かれ少なかれ不安を抱く。しかし、このような不安が極めて高く、身体症状が現れるなど日常生活に支障をきたす状態が6ヶ月以上続くと、社交不安障害と診断される。

全世界的な規模で見ると、多くのひとが社交不安障害に苦しんでいる。たとえば、社交不安障害の12ヶ月有病率(過去12ヶ月間に診断基準を満たした人の割合)はアメリカでおよそ7%であった。ただし、日本を含むアジア圏では12ヶ月有病率が比較して低いことが知られている。ちなみに日本では0.7%であることがWHOの調査から明らかになっている。12ヶ月有病率の低さはアジア圏で共通する現象である。日本を含むアジア圏では社交不安障害という疾患について、知識が十分に浸透していないことがその理由のひとつとして考えられる。今後、知識が浸透し、理解が深まれば有病率も高くなると予測される。そ

うなれば、近い将来には日本でも社交不安に対する専門的な介入が益々求められることになるだろう。

この学位請求論文の著者は本学大学院文学研究科において本学心理教育相談室の臨床心理士として心理臨床を行い、それと並行し行動実験を用いた実証的な検討を社交不安についておこなってきた。本論文は、著者の5年を超える博士課程における研究の集大成である。著者はこれまでに日本心理学会が発行する学術雑誌「心理学研究」に筆頭著者の論文を2本、国際的な学術雑誌である *Cognition and Emotion*, *Journal of Nonverbal Behavior*, *Brain and Cognition* に第2著者、第3著者として英語論文を掲載させてきた。また、本論文の研究1は日本心理学会より学術大会優秀発表賞を受賞しており、その研究内容を学会関係者からも高く評価されている。これらの成果は、著者がこの領域において数多くの研究実績を残し、十分な学識をつんでいることを裏付ける。

2. 総論評価

本論文は、この社交不安という疾患に焦点をあて、そのメカニズムを実証的に明らかにしたものである。社交不安障害に対する臨床的な対応は、実証的な証拠に支持されるものであることが望ましい。このような実証に基づく臨床心理学 (evidence-based clinical psychology) の立場から、本論文は4つの実験を行い、社交不安が高い人々の認知特性を明らかにし、その内的メカニズムと脳内機構をモデル化した。さらに本論文で明らかになった社交不安の認知特性とモデルに基づき、学位申請者は臨床的な応用への提言をおこなった。これは社交不安の心理臨床と基礎的理解をつなぐ重要な役割を果たすものとする。

論文の構成は心理学領域における学位請求論文として必要な要件を満たしている。本論文は社交不安が高い人々の認知特性を明らかにすることを目的とした研究1とその内的メカニズムと脳内機構のモデル化を行った研究2の2部構成となっており、本文184ページ(400文字詰め原稿用紙換算)、引用文献71件から成る。また、内容は学位請求者がこれまで学術雑誌に発表してきた内容を基礎としている。従って、形式、内容ともに心理学領域における博士学位請求論文として審査の対象となるものである。

各章の内容とその評価について述べる。まず、第1章「社交不安障害の特性」は、社交不安に関する研究背景をまとめたものである。この章は社交不安の定義、それを取り巻く社会的状況、先行研究における理論を扱った総説のかたち

をとっている。第1章は社交不安研究の現状を端的にまとめたものとなっており、著者がこの領域について、広範かつ適切な学識を有していることを裏付ける。さらに、単に先行研究をまとめるだけでなく、既存の研究の問題点も指摘しており、総説論文としての価値も高い。具体的には、ネガティブな感情の処理のみを取り上げてきた既存の研究を詳細にレビューし、別の面からのアプローチ、すなわちポジティブな感情について焦点を当てることの重要性を文献研究から導き出した。ここで浮かび上がった問題点をリサーチクエスチョンとし、以下に評価を述べる研究1と2がまとめられた。

第2章は「覚醒水準の観点からネガティブ情報に対する特性を捉える」と題されており、社交不安に認知特性について調べた研究1をまとめたものである。研究1では時間の推定に覚醒水準が与える影響を社交不安の高さに注目し比較したものである。社交不安が高い人は表情など社会的な刺激を観察すると、不安が増大し覚醒水準が上昇する。覚醒水準の上昇は体内の活動を早めるため、主観的に時間を長く感ずるようになるという仮説を著者は設定した。さらに、自分自身の研究に基づき、視線や表情によって社会的状況が異なることに留意し、怒り顔と中立顔を実験条件として用意し、さらにそれぞれの表情が直視をする条件と逸視をする条件を用意した。実験の結果、仮説の通り、社交不安が高いひとは、低いひとに比べ、他者の顔を見るとき主観的に時間を長く感ずることが明らかになった。また、社交不安が高いひとだけに見られた現象として、中立顔の逸視において特に時間を長く感ずることがわかった。これは、社交不安の高いひとが、中立顔の逸視、すなわち無表情で目をそらす顔に対し、拒絶や軽蔑を読み取ってしまうためと考えられた。このような傾向は社交不安の低いひとには見られなかった。つまり、この研究により、社交不安がもたらす独特な認知特性がひとつ明らかになった。ここで注目すべきことは、社交不安が低いひとにとって中立的な感情を持つ刺激も（中立顔の逸視も）、高いひとにとっては異なる意味を持ち、脅威となりうることである。この結果は、ネガティブな感情価に焦点を当ててきた既存の研究の問題点を実証的な証拠とともに雄弁に示すものである。

第3章「比喩的関連づけと左右大脳機能半球」は、ネガティブな感情価を持つ刺激だけではなく、それ以外の中立やポジティブな感情価についても焦点を当てるべきであるという著者の問題意識に基づき、社交不安障害の感情情報処理を、ネガティブ・ポジティブの両側面からモデル化したものである。モデル

化にあたり、著者は、近年、身体化された認知と呼ばれる枠組み注目を浴びる(1) 比喩的関連づけというアイデア、そして、(2)その大脳半球機能差からモデル化を行った。これは(1)社交不安の上昇は左半球の賦活を高めること、(2)片側半球の賦活は反対側半球の活動を抑制すること、(3)比喩的関連づけは右半球で優位な機能であるという3つの知見を結びつけたものである。特に(3)は自分自身が参加した大脳半球機能差を検討した基礎的な研究に基づいており、仮説の独創性が高い。また、社交不安の行動特性と脳の活動、そして、その情報処理という、しばしば別の研究領域で扱われるトピックを学位申請者独自の視点でまとめあげた点も新奇性の観点から高く評価できる。申請者はこのモデルを実証的に検討するため、大脳半球機能差を行動指標から調べるキメラ顔課題ならびに半視野呈示法を用いた3つの実験を行った。特に社会的な刺激である顔写真を刺激に用いた実験において、学位請求者のモデルを支持する結果が得られた。この結果は、学位申請者のモデルが、理論的に独創的で新奇性が高いだけでなく、実証的な支持があることを示すものである。また、キメラ顔課題や半視野呈示法実験の実施には、高度なコンピュータ・プログラミングと画像情報処理の技術と知識が不可欠である。これらの実験において、先行研究とも符合する安定した結果が得られていることは、学位申請者が心理学実験の方法論においても、十分な知識を有することを示すと考えられる。

第4章では研究1と2をまとめ、著者自身のモデルを精緻化するとともに、本論文の限界や今後の課題、そして、臨床応用への可能性について議論がなされた。大脳半球機能差に基づく著者のモデルは、単なる情報処理モデルではなく、神経科学的な基盤を持つものである。これは社交不安への脳科学・神経科学的アプローチとの親和性も高く、将来の発展が期待される。また、右半球の賦活といった神経機構に働きかける具体的な社交不安に対する臨床的介入を提案するなど、将来的な意味において臨床的な意義も評価できる。そしてなによりも、実証的な証拠を有するモデルという点で、実証に基づく臨床心理学として臨床の現場に対する極めて重要な貢献になると考える。実践の積み重ねだけではなく、実証的基盤のある理論に基づき介入を進めることができれば、よりの確で妥当なアプローチが可能になるからである。

3. 審査経緯

審査委員会は、主査である大久保街亜（専修大学人間科学部教授）、副査であ

る田中章浩（東京女子大学現代教養学部准教授）、岡村陽子（専修大学人間科学部教授）の3名から構成された。大久保は実験心理学を専門とする立場から論文を審査した。田中氏は、学位審査における透明性を確保するため、学外の専門家として審査に参加した。田中氏は表情に関する感情情報処理やコミュニケーションの専門家であり、国際的に著名な研究者である。最後に岡村氏は、臨床神経心理学を専門とする研究者であり、脳の障害と心理臨床の双方に広範な知識を有する。したがって、大脳半球機能という脳の構造と社交不安という疾患の関連について議論する本論文について、脳の機構と心理臨床の双方の立場から専門的な審査を行った。

平成27年5月に専修大学生田校舎4号館429教室において、18時15分から20時までのおよそ2時間にわたり本論文の口頭試問を行った。審査の透明性を鑑み、この口頭試問は公開で行われ、学内外の研究者およそ20名が参加した。口頭試問では、主査から学位請求者の紹介と学位請求に至った経緯について簡単に紹介がなされたのち、およそ1時間をかけて学位請求者による論文の内容に関するプレゼンテーションが行われた。プレゼンテーションは、自分自身の研究成果をグラフィカルな表現を適切に使い、わかりやすく、簡にして要を得たものとなっていた。このプレゼンテーションを受け、主査と副査との質疑応答、さらにその他の参加者を交えた活発な議論が交わされた。著者は主査と副査による専門的な質問やコメントについて適切に対応しただけでなく、その他の参加者から寄せられた一般的な質問や研究の意義についても適切に回答をした。論文の詳細を知らない参加者からも多くの質問があり、活発な議論が行われたことは、プレゼンテーションが的確に行われており、かつ、聴衆の興味を掻き立てる独創性と新奇性があったことを強く示唆する。そして、主査、副査の専門的な質問、その他の参加者からの一般的な質問などさまざまな種類の質問に適切に対応したことは、学位請求者の専門領域における高い学識を裏付けるものである。

4. 審査結果

本論文は理論的な独創性と新規性を備え、それらを妥当な方法論を用いて検証したものである。検証のために行われた実験方法とその結果の分析は、著者が心理学の方法論について高い専門的な知識とスキルを有することを裏付ける。また、著者が第1章でまとめた総説の正確さ、そして、口頭試問において様々

な質問に的確かつ正確に回答したことは、著者が専門分野において高い学識を有することを示す。したがって、審査委員会は、本論文による学位（博士（心理学））の請求を妥当なものであると判断する。